

# 小泉蓼三先生の人と学問

和田 繁二郎

1

小泉蓼三先生は明治二十七年（一八九四）四月四日、今の横浜市戸塚区矢部町八一番地で生まれた。そこは旧東海道筋で、元の戸塚村の中心部に当たっていたようである。父、藤治の生業は葉茶屋であった。先生は長男であったが、店を弟の金三氏に任せ、学問を志した。因みに、その店は今も残っている。

先生は、当時ではめずらしい中学への進学を望んだ。明治四十一年四月、神奈川県立第一中学へ入学した。学校までは八キロばかりあったが、汽車に乗らず、下駄履きで歩いて通った。

その在学中に、短歌に惹かれ作歌を試みた。そのころ、東洋大学の学生であった金沢美巖（種美）との接触があったらしい。その関係からか、卒業近くになって、尾上柴舟の「車前草」（第二次）に入会した。第一次の「車前草」が東洋大学の学生のクラブ的なものであったのとは違って、この第二次には東京大学の学生が多

数加わっていた。先生はこの第二次『車前草』の創刊された大正二年三月に中学を卒業している。

先生はすぐに進学せず、翌年、三年四月（一説に九月）に東洋大学専門部へ入学している。それは二科と呼ばれていた夜間部であった。姉の稼ぎ先である青山の金子という「糸物店」に止宿して、昼間は店を手伝っていた。

・青山の糸物店はさむきかもしまのきぬつけ糸まくわれに  
・糸買うとをとめ靴はき来にければ心ときめき糸をまくかも

第二次『車前草』は長く続かず、大正三年四月、同じく尾上柴舟を主幹とする新しい雑誌『水麴』が創刊された。先生は先輩の金沢種美や岩谷莫哀の縁により、その「水麴」に入会した。そこでは、第二次「車前草」と同様東京大学の学生がはばをきかせていた。

右の二首の歌は、その創刊当時の作であるが、習作期の幼さをもちながら、生活に即したリアリティを示している。それは当時

の歌壇においては、写実的な手法にとどまらず、生活をふまえた点において、極めて新しいものであった。ところが、『水甕』での批評は好意的なものではなかった。「糸物店の（中略）」は作者の名誉のために抹殺するがよからう。」とまで酷評された。先生は、当時の『水甕』の作品の一般的な傾向に対して不満を感じていたので、それに対して鋭い批判を投げ掛けた。

まず、次のような数首の作を挙げてみる。

- ・利根川の葦の板橋よく踏みしわが十八の春の悲しや
- ・処女なりし日の思出は余りにも淋しきものかふりじあの花
- ・あたたかき土に籠もりの春芽ぶくもの命に似るか吾が恋

先生はこれらを「抽象派の歌」と呼び、「全体が恰も朦朧たる春曙の空の如き極めて不鮮明なる場面」とし、「人間の心からの感激に非ずして、（中略）安価な感傷に墮する」ものときめつけた。そうして先生は具象を主張し、さらに、事実の写実を越えて、対象に自己を投入する「象徴」の方法を示唆している。（大正五年五月号「水甕の詠草をよみて」）この論説は七ページに及ぶかなりの長文のもので、二十二歳の文章としてはまことに優れたものであった。

この後二三の論説を発表しているが、そこでは、作品あるいは論説のとるべきものはそれなりに褒めてはいるが、多くはこのような厳しい批判であった。そこには、私学出身者の気迫のようなものが伏在していたのではないかと思われる。その反逆に似た鋭い筆鋒は、『水甕』の心ある人々には理解され、また先生を重ん

じさせることにもなった。結果、一時編集を任されることにもなったのであるが、その主張は多くの受け入れるところとはならなかったようで、大正十二年『水甕』を退社している。

そうして、その前年、『ポトナム』を創刊している。これは、今の韓国のソウルにおいてであった。

## 2

この『ポトナム』創刊にいたるまでの先生を、上記の作歌なしは歌論とは別に、その生活と思想の面において見なければならぬ。

先生は東洋大学で国文学を学ぶとともに、在学中に明治大学の経済学部か商学部に通っている。そうして、大正六年、東洋大学を卒業したころから、深川に養魚場を開いている。そこではかなり大仕掛に金魚を養殖しはじめた。ところが、その九月、突如襲った大津波によって、その養魚場は跡形もなく失われてしまった。身一つで逃れた先生は、つづいて某会社を組織して、いよいよ仕事か糸口についたとき、経済界の大不況に禍されて、資本の大半を失ってしまった。

度重なる破綻によって、先生はどうやら大陸への道を求めることを決意したようである。二葉亭や与謝野鉄幹の行動が頭に浮かんだのかもしれない。二葉亭とは状況は異なるが、鉄幹の方とはその二度目の渡鮮に似たところがある。

大陸への道というのは、今のソウルでの養魚場経営であるが、

どうやら大規模なものではなかったようである。大正六年のことであるが、そのころを追懐しての文章に次のようにある。

その頃の私は一個のトルストイアンであつて、相馬御風のものを愛読してゐたやうに覚えてゐる。(中略)全く百姓もしくは金魚屋として過したわけである。(中略)印半纏に縄の帯で働いてゐたり、京城駅に付いた鰻を荷車に積んで南大門黄金町東大門清涼里と、息を切らして走つたりしたものである。私が初めて京城で先生になつた時、近所の鮮人達は私が東大門の小学校の先生に出世したと言うて、酒をもちこんできた。

〔私と朝鮮〕『ポトナム』昭和二年四月号)

ここには、経営の規模や、一個の勤労者であつたことなどがうかがわせるだけではなしに、先生の様々な面を読み取ることができるといふのである。

「一個のトルストイアンであつて」といふのは、つづいて述べられている相馬御風の影響によるものようである。相馬御風は明治末年から大正へかけて、詩人・評論家として活躍していたが、大正五年二月『還元録』を刊行して、翌月、一家をあげて故郷糸魚川へ籠もつた。御風はそれまで斬新な論をもつて文壇の注目を集めていたが、斬新であるだけに、常に論旨の変貌が激しく、そこに特徴もあり、また欠点もあつた。この点について自己批判したものが『還元録』であつた。それは、これまでの自己の思想的精神的な変貌を、外部的な文壇の毀誉褒貶と、外来のイズムによつて操られてきた欺瞞と観じ、この大きな誤謬から解脱しなければ

ならないという決意を披瀝したものであつた。大正五年というのは、先生の言うところの「この頃」であつた。

この『還元録』の「自序」に、「これまで好加減に集めてきた知識などから全然別れ去つて、単なる一個の平凡人となつて生活の第一歩から踏み直す」と言い、「私自身の持つて居た最も真実な要求を(中略)完たして行く事より外にない」と言う。また、これからの仕事としては「私を今日の心にもまで導いてくれるに与つて力のあつたトルストイ其他の著作の翻訳以外、出来るだけ何も書いたり喋舌つたりしない決心です」と言っている。

本文の中で、彼が故郷の人々に接して変化した自分を次のように語っている。

これまでは兎角先方に向つて自分を理解させよう、自分の持つて居るある特別なものゝ値打を理解させようと云ふやうな氣持で彼等に対し勝ちであつた私は、今度は、反対にこちらから先方を理解しようとする態度に出て彼等と接した。彼等を感じ化するよりも、彼等の持つて居る善いものによつてこちらが感化して貰はうと云ふやうな態度で彼等に接した。

これは、まさに民衆のなかに入つて、その人間の善良さと、その根源的な(人間性)を学び、それを回復することであつたと言えよう。

先に見てきた小泉先生の勤労者としての生活が、この御風を介してのトルストイアンとしての精神に基づいていることを知る事ができよう。そうしてまた、当時の先生の周辺の、彼を地の人々

との交流がどういふものであったかをも窺わせる。植民地支配の体制の中にあつても、その制度をこえての人間的な交流を見なければなるまい。

### 3

もう少し先生の〈人間〉について見ていきたいと思う。大正十二年七月号の『ポトナム』に「根津雜信・五」と題して、次のような文章が載せられている。

M兄 信じてゐたものに裏切られる程寂しいことはない。度々さういふことに逢つてゐると、終には何事も自分以外に向かつては求めまいと考へるやうになる。厭人的とか独善的とかいはれるかも知れないが、人間に対して求めない心は（然も何物かに向つて求めずにはゐられない）、つひ自然にもしくは夢に向つてゆくやうになる。人間と二人である代りに、自然と夢と、二人でゐようとする。

今生きてゆくといふことから、夢をとりさられるのは、私の生活の大半を奪はれることなのである。さう言つたら或いは現実主義者から笑者にされるだらうが、生きてゆくことは即ち都会生活の現在の私にとつては未来に対する希望、願ひ、夢と共に暮してゆくことに外ならないのだ。（中略）

ふりかへつてみると、その夢は私に或時は安甘川や清涼里で鍬鋤を握らせ、或時は、何万の金魚をかかへて大連から満州に行商人としてのはかない其日其日をすごさせた。すでに三十歳

に及んで、再び都会生活にかへつたものの心は、常に自然をなつかしみ、さすらひの旅路をしのんでゐる。

長い引用になつたが、ここにはキーワードとして「夢」と「自然」が出てくる。「夢」は人間不信から生じた理想のようである。そのデータは示されていないが、先に見た養魚場をめぐる人々ではないことは確かである。都会すなわち東京に戻つてからのことなのである。因みに、この手記の宛名のMというのは、ともに手を携えて『ポトナム』を創刊した百瀬千尋である。

先生にとつて信じ得る人のイメージは、かの御風が「我は如何なる人間であるか、我は如何なる生活をなしつつあるか、我は果して我が他に対し、社会に対して要求して居る如き人間であるか、要するに我みづからは真に一個の『善き人』であるか」とのべているあたりに発して、「汝みづからを善くせよ、汝みづからを完全にせよ」「汝みづから真の人間たれ」というところにあつたのではないか。それはみずからにも要求されるものであつたとともに、他に対しても要求されたものではないかと思う。

その「善き人」について、御風は「真に何が善く何が悪しきかの批判をなすに足るべき人格の根底なきは勿論、（中略）真に何が善きか何が悪しきかの判断を下す者が極めて少ない。」と嘆いている。ここに言われている「人格」云々は、『ポトナム』創刊のころの合い言葉であつた。「よい詩はよい人格からうまれる」と先生は説いたのである。

もっとも、「人格」の概念は御風をまつてもなく、阿部次郎

が『三太郎の日記』（大正三年）以後、その持論としており、大正教養派の枢軸をなしたものであった。大正十一年のころは知識人の常識的な概念になっていたのかもしれない。先生もみずからの充たされぬ人間関係の修復を願って、この「人格」にその一端を託したものと見られる。その願いが充たされなかったところにその短歌には、その特徴として「寂しさ」が大きな位置を占めることとなった。

『ポトナム』の創刊号（大正十一年四月）に「野に立ちて」という一文が載せられている。ここに、先に注目したキーワードの一つである「自然」の意味を見ることができよう。

私は悠然たる自然のふところに、僅かに自分の生命を寄せてゐる果敢ない心の放浪者なのだ。（中略）私は憂愁に充ちた沈黙と孤独との世界から逃れたい心と、荘嚴な自然のもつ厳しさに對する微かな思慕とより、杖を南山に曳き、或は清涼里の松山に、安甘川の草山に遊んだことがある。さうした折、たびたび私の前に展開せられた所の、丈低い黒松の儼然な成長の外には何等の植物をも持たぬ、すでに死せる山々の中腹には、崩壊しかけた城壁が、浪漫的なその骸を日に光らせてをり、それらの山の背後には、山頂に屍のやうな巖石を並立させた北漢山が巍峨として、青く澄んだ蒼海色の空を限つてゐるのを見た。

それは、何といふ荒涼さであつたらう。それは疲れはてた、この世に望みを失つてしまつた魂のみの抱かるべき世界なのであつた。私はさうしたこの国の自然に、無限の魅惑と郷愁とを

覚えさせられたのである。

この頃の朝鮮の自然は殊に寂しい。植民地特有のポプラは落葉しつくした枯枝の細かな直立の姿を、澄み徹つた冬空に高くひろげて居り、（中略）時としてははやくも春らしい明るさを持つた白雲が、悠々東の方へ流れて行くのである。

このような、自然はおよそ日本的な風雅と優美の世界とは異なっている。ここには伝統的な花鳥風詠を予想することはできない。先生のこのような自然に寄せる心は「法悦境」となり、「純粹と洗練と統一」とを獲得するに至つた。

・ポトナムの直ぐ立つ枝はひそかなりひと時明き夕べの丘に

『ポトナム』創刊号（大正十一年四月）（ポトナムIIポプラ）

## 4

右の人間不信を「善き人格」と「自然」とによつて拭い去らうと念じた先生は、自己自身に對する厳しい自己批判をも語っている。同じく「野に立ちて」の中の記述であるが「社会に對して、如何に生活すべきかを考へなかつた私をどうしよう。（中略）自分の人格のうちに幽かなりとも、何の輝きがあり得よう。」このような低迷を打ち破ろうと努めている時、『ポトナム』の創刊と、もうひとつ、懐かしい京城での就職のことがあつた。

先生はすでに大正九年、福井県の北陸中学に、またその翌年、埼玉県川越中学の教壇に立っているが、いずれも一年ほどの勤務で、やや異常の感があるが、その間の事情はあきらかではない。

そして、大正十一年一月、京城公立高等女学校教諭となつてゐる。再び「野に立ちて」の文章にしたがうと、自然が私の心の「純化と洗練と統一」を教えてくれそうな気さえてゐる。」と言つたあとで、

自ら甘え、自ら怠りがちな私の頃よ！しかも、終に、何所まで彷徨ひ行く心なのであらう。静かな、静かな、雨の夜、私はひとり、寂しい自分の魂を凝視しながら彷徨ゆく心の行方を思ふのである。

と言つてゐる。この文章執筆の日付が二月二十四日であるから、すでに京城高女の教壇に立つてゐた先生にとつて、教壇が「彷徨ゆく心の行方」であつたとは思ひにくい。

先生は『ポトナム』四号（大正十一年七月）から、「歌人大伴家持」を連載しはじめてゐる。これは純然たる学術論文である。

これは、まもなく『評釈・大伴家持全集』（大正十五年五月刊）として結実した。この学問の世界が、「心の行方」ではなかつたかと思う。そう簡単に処理しにくい面もあるが、少なくとも、短歌とともに先生の生涯を貫いたものであるから、そう考へてさしつかへあるまいと思ふ。

この学者、小泉琴三の誕生には、恩師、藤村作博士の勸奨があつたのではないかと思はれる。それにしても、なぜ先生は万葉歌人を選んだのか。藤村博士は近世専攻であつた。先生とともに下宿してゐたことのある片岡良一は、後に近代文学研究の第一人者となつたが、當時は、大正九年一高を中退し作家たらんとしたが果

たさず、十年、東大専科に入学、藤村博士の指導のもとに、井原西鶴を卒業論文とし、十四年、卒業してゐる。

先生が大伴家持をとりあげたのは、先生の歌人としての共通点にあつたと見られる。それも、その心において共通した「寂しさ」に着目したのである。先走つて言へば、家持に自己を見出したのである。

『評釈・大伴家持全集』の「序」で藤村博士は次のように書いてゐる。

古典文学の研究は、その形像の分析から、その内奥に律動する所の内部生命の把握に到達するに在るとしても、ここに達するには基礎的な研究の幾段階を経なければならぬ。本文批評はその一つである。これを欠いた研究は往々にして砂上の楼閣となる。語句章節の注釈もその一つである。本文の正確な理解なくしてどうしてその生命を捉へることが出来よう。環境に關して十分の知識を準備することも亦その一つである。これがなければ屢々危険な独断に陥るであらう。これ等の段階の上に客観的態度を取つて科学的方法を用ふるとしても、その科学的方法といふ中には各種科学の知識が予想される。併し冷静な科学的方法は畢竟文学の生命を捉へ得る方法ではない。そこに主観的態度の必要がある。かくて古典文学の研究には真摯の態度を要する。冷静と情熱とを要する。

この一文は、古典文学研究の最も基本的な意識、方法を述べたもので、今日にも十分に通用するところである。しかし、この方

法は当時の国文学界全体には受け入れられない極めて新しい方法意識であった。当時の国文学界の主流は、本文研究（異本の調査と本文の校合による原本の探索）と語句・事項の注解、あるいは成立年代の判定または作者の伝記調査であった。それらが、研究の名をもって行われていたのである。ここで言われている作品の「内部生命」「文学の生命」即ち作品の内容、本質以前の、いわば文学を盛ってある器を取り扱っている状態であった。「内奥に律動する所の内部生命の把握に到達する」という、作品の文学としての本質に迫るような営為は行われていなかったのである。

このような国文学界の状況に疑問がもたれ、如上のような方法をふくめて、様々な新しい方法が澎湃として提唱されたのは、約十年後、昭和十年のころであった。即ち、岡崎義恵の文学学的方法、近藤忠義等の歴史社会学的方法、斎藤清衛や風巻景次郎等の文学精神史的方法など、あるいは折口信夫の民俗学の援用などがそれであった。

先生がいち早くこの正統な研究への指導を受けたということは、まことに僥倖であったと言わねばならない。しかしまた、そういう指導を過たず受け入れ得たということは、先生にそれだけの用意があったということも見落としてはなるまい。すなわち、先述のように、先生の生活と社会との接触が密であり、またその思想にヒューマニティが確立されていたことを思わねばなるまい。

藤村博士の序文はまだまだ続く。この著書の真髓にかかわるところであるから、少し長くなるが引用しておこう。

小泉琴三君は歌人としては現歌壇知名の人である。雑誌「ポトナム」は君によつて重きをなしてゐる。けれども古典文学の研究家として君を知るものは余り多くはあるまい。「ポトナム」誌上なる家持の歌の注釈や、「国語と国文学」誌上の家持に関する二篇の論文は蓋し君が研究者としての片鱗を示したものである。これ等はよく君の萬葉集に関する学術的探求態度の如何に真摯であるかを語つてゐる。家持を知り、彼の環境を探り、語句の意を積いた上に、その形象を通して作家の心の微妙な動きを感じて行かうとしてゐる。さすがに多年作歌の労苦を重ね、創作の心理に通暁してゐる所に及び易からざる長所がある。右の『国語と国文学』誌上の二篇の論文というのは、大正十四年十一月号の「家持論」と、同十五年二月号の「歌人としての家持」とである。この二篇の論文は『評釈・大伴家持全集』に収められ、巻頭を飾っている。

前者は「序」に述べられているように、歌人として「作家の心の微妙な動きを感じて行かうとしてゐる」し、「創作の心理に通暁して」家持の歌に接していると見られる。これは、言い換えれば、歌人琴三の心をもって家持に対してということになる。さらに言えば、家持の歌に自己を見いだしているとも言えよう。

「人としての家持」の冒頭には「詩人の心はつひに寂しい。家持もまた寂しき詩人であつた。」とある。それに続いて、その生い立ちから成年期の生活に説き及んでゐる。天平十年、家持が「妾」を失つた時の彼の容体について、次のように言う。

家持の恋歌の殆ど全部は主として恭仁京時代四五年間に成つたものと思はれる。(中略) 亡妾を一転機として彼はその情緒生活に判然した意識をもつやうになつたのであつて、それ以前の彼の心は主として政治上の地位といふ方面に向けられ、性的生活の方面は亡妾との間の本能的な関係によつて満たされてゐたものであると考へたい。それが、政治方面の不満と後援のない不安より来る焦燥と無自覚的に愛してゐた女性の死などが原因となつて、彼をば、情緒生活の方面へひきつけていつたのである。(中略) 奈良朝の文化は聖武帝の御代に極まる。彼の生れる頃、時代はすでに国家中心思想から離れて、歩一步個人中心の美的生活へと進みつつあつた。美的生活に精神的理想が伴はねば、それは享樂生活へと墜ちてゆく。家持は時代を超えた高き精神的の思想に生きた人ではない。むしろ時代の精神の流を最もよく表現してゐる人である。何物かを愛せずにはゐられないにもかかはらず、つひに愛し得ない寂しさ——それは詩人の運命である。

長い引用をしたが、先生自身のことを告白してゐるのではないかとまで思はれるような記述である。即ち、先生イコール家持を思はせるのである。先生の心が家持の内部に浸透して、そこに「詩人」の「寂しさ」を見つめてゐる。ここに、先生が最初の本格的な研究に家持を選んだ必然を見ることができよう。

その当時、万葉集のなかで、家持はその写実性やますらおぶりや、また素朴さの乏しさにおいて、歌人にも研究者にも軽んじら

れてゐた。その家持を取り上げ一冊にまとめたところだけでも先駆性があつた。

なおこの後に、「家持をめぐる人々」の一章を付し、さらに、代表的な歌百余首の評釈とその全歌を登載している。「全集」と称した所以である。

評釈の一例を挙げておこう。

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情かなしも  
独りし思へば

(左註省略) 即ち「うらうらと照りわたつた春の日に雲雀が空にのぼつて鳴いてゐる。それをききながら私の心はまことにかなしい。たつた一人で藻の思ひにふけてゐるが故に」と。

素朴さはないが、近代的な感覚の洗練さが手法の冴えと共に渾然たる一首をなしてゐる。第一句、二句のにの重音、第五句にしの助辞を入れて字余りにしたところ、第四句と五句との倒置とともに深く意をいたして味ひたい。(中略) 概念歌には万人共通の情趣はあつても、作者固有の情緒はない。情緒は深く狭くなる程即ち個性的になる程かへつて万人の魂をゆるする。深くなると狭くなる。けれども更に広くなるのである。最も個々のに徹した境地は最も万人に共通する。ここまで来て、家持の世界も、概念から真の詩の世界にと沈潜し得たと言へよう。

## 5

先生のライフワークとも言うべきは『近代短歌史 明治篇』

(昭和三十年六月刊)である。これは長い年月をかけて成ったものである。

先に述べた、昭和初期までの国文学の研究対象は、中世までであった。近世の作品でさえもがまともには研究されていなかった。それを、進んで対象として選んだのが藤村作であった。近世のものもそういう状態であったから、明治以後すなわち近代文学などは全く顧みられず、国文学者の本格的な研究対象にはならなかった。そこでは、英文学者、あるいはジャーナリストの手によって、明治・大正文学史が書かれる程度であった。国文学者が、近代文学を本格的に研究しはじめたのは、比較的新しいことである。

近代文学が研究の対象として喚起されはじめたのは、大正十二年の関東大震災の後である。当時、資料の焼失が文化人の関心をひいて、吉野作造が「明治文化研究会」を発足させたあたりからのことと見てよい。この会は、文学だけではなく、文化全般にわたるものであったが、この風潮のなかで、『早稲田文学』（大正十四年三月号）が「明治文学考 混沌期の研究」を出した。また、講座ものでは『日本文学講座』が大正十五年より昭和二年にわたって刊行されたが、その編者は藤村作で、その十一・十二・十三巻が「明治時代」としてあてられている。このあたりから、近代文学の研究が本格的にはじまったと言っているが、国文学系の研究者の活動はいまだしであった。この講座の「上編」は各ジャンルの概説であるが、「明治文学概説」は生田長江であり、以下専門の研究者はいない。すべて、評論家、作家、詩人、歌人、俳人で

あった。ここでは短歌は土岐善麿が書いている。また「下編」は代表作家についての論であるが、歌人は正岡子規だけで、それも弟子の河東碧梧桐が書いている。

近代文学全般にわたったの、専門研究者の活動は前記の片岡良一の「現代文学諸相の概観」（『国語と国文学』昭和四年四月号の特集「現代文学考察」）にはじまると言っている。しかし短歌のみの歴史を書いたものはまだなかった。ようやく斎藤茂吉が昭和六年、「明治大正和歌史」（『短歌講座』改造社）を書いているが、言うまでもなく専門の研究者ではなく、おのずから「アララギ」に偏った面もみられた。また、短歌結社では『水壺』がその年の一月号で「明治大正短歌研究」を特集している。

先生は昭和二年に、高等教員国語科教員検定試験に合格しており高等学校や専門学校（旧制）の教員になれる資格をとっていた。そこで、研究者としての職につくことが可能になったわけで、何らかの研究のテーマを胸にあたためることになったと思われる。そこに実作者として最も身近で、しかも、右のようにようやく研究のいとぐちについたばかりで、未開拓といつてよい短歌史にライフワークを求めようとするに至ったと思われる。

先生の研究方法は、先に『評釈・大伴家持全集』の藤村博士の序文に示されたように、まず「本文」の確立であり、ついで作者の「環境―時代、社会」についての認識を十分にし、そのうえで作品の生命（本質）を解明しようとするものであった。ところが未開拓の分野であるから、本文に該当する既成のコレクションが

あるわけではない。そこで、明治大正六十年数年にわたる個々の歌集、雑誌を蒐集しなければならぬ。これは言語に絶する困難事である。それを先生はあえて実行しはじめたのである。

古い新聞、雑誌も歌集も、図書館に行つて見なければならぬ。それも手元に置くとすると書き写さなくてはならない。今のようにゼロックスがあるわけではない。それに、個人出版の多い歌集のことであるから、図書館にないものも多い。古書店を漁つて買入れねばならない。まったく気の遠くなるような話である。

そののひととおり出来上がったのが『明治大正歌書年表』（昭和十年十二月刊）であつた。この後、すべてが完成したが、『明治大正短歌資料大成』全三巻であつた。その第一巻は『明治歌論資料集成』（昭和十五年六月刊）である。これは、和歌革新の声が起こりはじめた明治十五年のころから、革新の論議のほぼ出揃つた明治三十年までの主要なすべての文献五十二編を復刻している。短歌革新の理論の展開を迎えるには欠かせぬ文献である。第二巻は『明治大正歌書綜覧』（昭和十六年三月刊）で、ここには明治元年より大正十五年にわたつて刊行された歌書（歌集・歌論書）および、短歌雑誌を網羅して、著者、発行年月、発行所、サイズ、ページ数、代表歌、雑誌の場合は刊行の期間、編集者名、主要会員名、成立とその主張等にわたつて詳細に解説が施されている。ちなみに、これに収録されている歌書・歌誌は、立命館大学図書館に「白楊荘文庫」として収められている。第三巻は『明治大正短歌大年表』（昭和十七年四月刊）で、これには明治元年

より月を追つて、単行歌書、雑誌、新聞の順に従ひ、著者名、歌論の題名と筆者名、作品の題名（重要と見たもの）等を記載したものである。凡例に、収録歌書三千五百九十七冊、未見のもの百十冊余、これらは月不詳の部に収めたのである。これは、先に刊行された『明治大正歌書年表』が単行本のみであつたのに、雑誌・新聞登載の論説・作品を増補したもので、まさに大年表である。

これらの膨大な資料を駆使してなつたものが、その後の先生の仕事であるが、その最初のものが『正岡子規 根岸短歌会の位相』（昭和九年十月刊）である。子規の三十三回忌に際して、その再評価を試みたもので、近代短歌史における写真主義の性格を解明するとともに、「根岸短歌会」を一つの精神共同体として分析し、その史的位相を明確にしたものである。

次には『近代短歌の性格』（昭和十五年九月刊）がある。これは諸雑誌に発表したものをまとめたもので、「近代短歌の特質」「近代短歌の方向」「近代の歌書歌壇」の三章よりなつてゐる。第一章では1「明治文学に於ける短歌の位置」2「明治の和歌革新」3「新派和歌の前駆―落合直文論序説―」4「近代短歌に於ける自我の自覚とその展開―与謝野寛試論―」5「近代短歌に於ける写生論の成立―正岡子規歌論の本質―」6「近代短歌完成への前提―斎藤茂吉『赤光』の鑑賞―」7「明治・大正歌壇と新人の業績」8「明治・大正歌壇結社の興亡」。第二章では、1「短歌の転向」2「問題四つ」3「完成より動搖への過程」4「短歌美学の拡大」5「歌壇の予望」6「歌壇の新人」7「近代短歌の方向」。

第三章では、1「維新勤王志士と和歌」2「明治の和歌と開化」3「明治短歌史新資料二三」4「明治前半期の京阪・中央歌壇」5「御歌所と藩閥」6「長歌改良論と弘綱の書信」7「新派和歌の発生に至るまで」8「あさ香社の人々」9「与謝野鉄幹と大阪」10「窪田空穂と新詩社」11「明治三十三年の秋」12「山田美妙の和歌・歌論」13「田山花袋とその和歌」となっている。これらのうち第二章は当代短歌の時評的な性格の論が多いが、他は短歌史に関する考察が多く、学問的著作と見られる。

先生のライフワークと見られるのは、『近代短歌史 明治篇』（昭和三十年六月刊）である。その「凡例」に「本書は、昭和二十年に書きあげたものである」とある。また前述の『明治大正短歌資料大成』三巻の上にならっている旨がのべられている。

はじめに「序論」があつて、「和歌史の方法」について述べている。それは、単なる資料の羅列やその解説、あるいは歌人の列伝的叙述を排して、文化史との関連、ないしはその一環として記述されるべしとしている。そして、その時代社会との関係は、理論としてはあからさまに説かれてはいないが、時代の政治や経済現象のうえに説き証されている。これは、かつての『大伴家持全集』著述の延長線上にあるもので、現実すなわち「環境」を重視しつつ、作者の主体、具体的な資料による裏付けなどにより実証的に結論を導き出している。

また、時代区分については、「和歌史」の伝統へ遡って広く考察を巡らした後、主題である「近代和歌の時代区分」に及ぶ。そ

こでは、「(一) 胎生期—明治初年より二十五年ごろまで。(二) 近代短歌成立期—二十五年より三十三年ごろまで。(三) 展開期—三十四年ごろより、大正三年ごろまで。(四) 円熟期—大正四年ごろより十五年まで、としている。これを「類型」の推移の上より見ると、理想主義的浪漫派の傾向の時代と写実的現実的傾向の時代とに分けている。前者は近世期継承の擬古派の和歌をも含み、さらにその改良を主張した主情派・浪漫派をこれに入れている。後者は、明治後半期に発生した写生派の展開としてとらえ、大正期においては、この理想主義的傾向と、写実主義的傾向とが相融和し、写生論が象徴論にまで高められたとしている。

この大綱に従つて、まず第一章「和歌精神の継承と展開」においては、維新勤王志士の歌と明治の宮廷和歌がとりあげられ、第二章「近世期継承の和歌」においては、明治初頭の歌壇の展望から新題歌の発生までを説いている。第三章「啓蒙思潮にもとづく和歌改良論」では、様々な和歌改良論を展望しつつ、末松謙澄の『国歌新論』に及んでいる。第四章「近世期継承和歌の円熟及びその再生と近代意識の萌芽」では、宮廷和歌以外の擬古派和歌の諸相のなかに近代の萌芽を求めている。以上はいわゆる近代短歌の発生の前史に属するものであつて、先生はこれを「試論」と称しているが、それだけに従来の研究の未到の部分であつて、精細な叙述を見せている。第五章「近代短歌の発生」においては、まず「主情派」と規定して、「あさ香社」の業績に注目し、ついで「折衷派」として「竹柏会」について論じ、さらに「あさ香社」

より生じた「いかづち会」「若菜会」について記している。第六章「理想派短歌の展開」では浪漫派として「新詩社」及び、叙景詩運動について述べ、従来の写実主義の立場からする否定的評価に対して、時代の動きの中で、現実を反映した要素を持つものとして、一つの評価を試みている。第七章「現実派短歌の先駆」では、写生派すなわち「根岸短歌会」の諸相について精細な分析を試み、その成果を明確にし、本書中の最も生彩ある論証を行っている。第八章「理想派短歌の発展並びに理想派短歌の展開」においては、新詩社以後の、スバルや自然主義的短歌の発生について、また、根岸短歌会以後の「アララギ」の成立に至るまでの経過について説明している。

これをもって、明治の時代を終わり、大正の時代に受け継がれるはずであったが、その仕事は着手されたばかりで、身辺の不穩

のため、膨大な資料を前にして、ついに完成を見なかったことは惜しみて余りあるものがある。

なお、著書にはこれらの他に、『美妙選集』（昭和十年）、『元政・良寛・愚庵』（昭和十一年）、『維新志士勤王詩歌評釈』（昭和十三年）『日本語文の性格』（昭和十九年）その他がある。

これら多くの優れた業績を残し、また長年大学教育に尽瘁しながら、敗戦後、教職不適格の名のもとに教壇をさられたことは、まことに痛恨の極みである。この事態の真相については、白川静博士が『立命館文学』平成元年六月刊、五一―一号にて詳細に述べているので、ここには引用を割愛するが、まことに不条理なことであった。先生は晩年を教育図書出版に従い、比較的早く、昭和三十一年十一月二十七日急逝された。享年、六十二歳であった。

### 小泉荻三先生年譜

明治27年（一八九四）四月四日 神奈川県横浜市戸塚区矢部町八

一番地に生まる。本名、藤造。父、藤治 母、ヨネの長男。

明治41年（一九〇八）14歳 四月 神奈川県立第一中学校入学。

大正2年（一九一三）19歳 三月 同校卒業。このころ「第二次車前草社」入会。

大正3年（一九一四）20歳 四月 東洋大学専門部二科に入学。

小泉荻三先生の人と学問

歌誌「水甕」創刊に参加し、筆名「藤三」とする。

大正6年（一九一七）23歳 三月 東洋大学専門部二科を卒業。

大正8年（一九一九）25歳 堀江登喜と結婚。

大正9年（一九二〇）26歳 福井県北陸中学校教諭となる。九月

二八日 長男 清 生まる。

大正10年（一九二二）27歳 一月八日、父藤治逝去。七月 埼玉

県川越中学校教諭となる。この頃歌誌『聖土』を創刊。

大正11年（一九二二）28歳 一月 京城公立高等女学校教諭。四

月 百瀬千尋と「ポトナム短歌会」を創立、『ポトナム』を創刊。「野に立ちて」を創刊のことばとする。

大正12年(一九二二) 29歳 一月 筆名を「琴三」と改める。八月 水甕社を退社。

大正13年(一九二四) 30歳 二月 東京府立第一商業学校教諭。

五月 『ポトナム』を休刊し、『橄欖』と合併。

大正14年(一九二五) 31歳 一月 『ポトナム』を復刊、第四巻一号とする。

昭和2年(一九二七) 33歳 七月 高等学校国語科教員検定試験に合格。十二月 新潟県立新潟商業学校教諭。

昭和3年(一九二八) 八月 登喜と離婚。

昭和5年(一九三〇) 36歳 三好桂子と結婚。九月 長野県立女子専門学校教授。

昭和7年(一九三二) 38歳 九月 立命館大学専門学部文学科教授。

昭和8年(一九三三) 39歳 一月 『ポトナム』誌上に「現実的新抒情主義短歌の提唱」を発表し、今後の指針とする。

十一月 『立命館文学』の編集主任となる。

昭和9年(一九三四) 40歳 一月 『立命館文学』を創刊。

昭和10年(一九三五) 41歳 四月 立命館大学専門学部文学科主事。

昭和13年(一九三八) 44歳 四月 『明治大正歌書年表・増補版』により、第一回日本歌人協会賞を受く。十二月 陸軍省

嘱託として北支・中支に従軍。

昭和14年(一九三九) 45歳 四月 中国より帰国。

昭和15年(一九四〇) 46歳 陸軍省嘱託を解かれる。六月 立命館より向こう三カ年中国へ出張を命ぜられ、国立北京師範大学教授を兼任する。

昭和16年(一九四一) 47歳 四月 立命館大学法文学部国文学科が創設され、教授となる。五月 華北日本語教育研究所員を兼任。

昭和17年(一九四二) 48歳 九月 国立北京外国語専科学校上席教授を兼任。

昭和18年(一九四三) 49歳 四月 立命館大学より中国出張を解かれ、立命館大学に帰任。

昭和19年(一九四四) 50歳 三月 『ポトナム』第二・三巻(通巻二五四号)をもって休刊。四月 雑誌統合の国策により『アララギ』と合併する。

昭和20年(一九四五) 51歳 二月八日 長男小泉清、輸送船団にて台湾沖(高雄州ガランビ方面)南下中爆撃を受けて戦死す。

昭和21年(一九四六) 52歳 出版社白楊社を組織する。(夫人名義)

昭和22年(一九四七) 53歳 一月 旧ポトナム同人を中心として歌誌『くさぶち』(羽田書房発行)を創刊。六月 昭和

二二年政令第六二号第三号第一項(教職不適格)により

立命館大学教授の職を免ぜられる。

昭和24年（一九四九）55歳 一月 『くさぶち』選者制をとる。

十二月 有限会社白楊社を株式組織に改め、編集顧問となる。

昭和26年（一九五二）57歳 一月 『くさぶち』の誌名を『ポトナム』に復す。四月 ポトナム復元三〇〇号記念大会。

九月 教職不適格としての指定を解除される。

昭和27年（一九五二）58歳 十一月二十一日 「明治和歌史の研究」により文学博士の学位を受ける。（東洋大学提出）

昭和28年（一九五三）59歳 四月 関西学院大学教授。四月 ポ

トナム三十周年記念大会。（京都）

昭和29年（一九五四）60歳 金城学院短期大学教授を兼任。

昭和31年（一九五六）62歳 十一月二十七日急逝。三十日、紫野

上野町光念寺において告別式。法号「清泉院映誉瑞光藤雲居士」。洛東、法然院に葬る。

昭和32年（一九五七）五月 『ポトナム』追悼号刊行。

昭和50年（一九七五）十一月二十四日 法然院山内に歌碑を建立。除幕式を行う。